仏岸・正空の墓

③ 光明寺（廃寺）

大和町今山の北、男女山南のふもとに浄土宗光明寺跡がある。鎌倉三代執権北條泰時の子孫が仏門に入り、筑後国（福岡県）善導浄寺の開山聖光上人の弟子となって修行し「正空」と号してこの地に光明寺を建てたのが始まりとされ、建治年間今から約七百年の昔である。

正空上人は性柔和で頭脳明晰、ついに一宗の奥義を究めた名僧で、その徳を慕う者数多かったという。光明寺の堂宇は「大廈宝塔の備え厳然として」とあるから大規模な建築だったのであろう。浄土宗寺院調によると、寺領は田畑屋敷五反八畝十六歩、地米八斗三升八合となっている。現存している聖光寺は光明寺の隠居寺で外に末寺として金蓮院、福萬院、宗明院、三浄寺、平等寺、西念寺等が記録に残り、今は皆廃寺になっているが、昔は今山、横馬場一帯は仏法繁栄の霊地であった。それからおよそ三百年を経た元亀元年（一五七〇）今山合戦の時、大友の部下九人が当寺本堂で自害したが、その時彼等一党の放火で光明寺はもちろん末寺に至るまで焼失した。それから十余年後乃誉上人という有徳の僧がこの地に寺を再興し在住すること数年、のち還俗して堤又二郎と名乗り、

太閤秀吉の朝鮮役の戦陣に加わり、戦功をたてた事で光明寺の地五十余石を与えられている。こうして栄枯盛衰の過程を経て約三百年前の寛文のころ、臨済宗の僧仏岸和尚が霊場の荒廃をなげいて信徒と共に荒地を開きお寺を建て、観自在尊を本尊として安置し布教に勤め、併せて北方の峰に弁財天を祭った。

仏岸はもともと臨済の僧であったが、天性浄土の教義に帰依していた名僧である。和尚が如意宝珠経を読経していると白蛇が現われ、又法華経を読経していると机上に不思議な虫が出たりあるいは白狐が出て来て経文に耳を傾けたという伝説がある。

後年長崎の福済寺管主として二十余年を過し、享保十四年（一七二九）八十六才で死んだ。分骨して当山に葬り石塔を建て碑文に「當山中興仏岸圓老和尚、享保十四年己酉天十一月八日」とあり、庵室の西方山中に建てた。（聖光寺古文書による）〔享保十四年（一七二九）〕

二、南北朝時代

概説

鎌倉幕府は二度の蒙古襲来とその後の警備に莫大な費用を使い、その上戦功のあった者に恩賞を授ける土地もなく、御家人の不満も高まってきた。そのような時、幕府の執権北條高時は遊興三昧にふけり統率力を欠いていた。このような状態を見逃さず、後醍醐天皇は討幕の計をめぐらし、正中・元弘の両

変は失敗に終わったが、次第に幕府の政治に不満を持つ武士達が天皇に味方するようになり、ついに建武元年（一三三四）天皇の夢は実現し、幕府は滅亡して天皇親政がとられた。これを建武の新政という。

しかしこの新政は公式の不和、例えば恩賞が公家に厚く武士に薄いなどから足利尊氏が反旗をひるがえし、わずか二年で崩れ去ってしまった。つまり建武二年（一三三五）尊氏は新田義貞討伐を名目として京都に攻め上ったため、天皇は京都をのがれ吉野に朝廷を開いた。一方尊氏は光明天皇を奉じ京都に朝廷（北朝）を開き、吉野の朝廷（南朝）と対立し南北朝時代が現出するに至った。

1　南北朝時代の郷土

延元元年（一三三六）正月尊氏は京都に入り、後醍醐天皇は延暦寺へのがれた。しかし北畠顕家が大軍を率いて西上し、新田義貞、楠木正茂、名和長年らの諸将と共に尊氏を攻めたので尊氏は敗れて九州へ逃げてきた。この時、草野、神田、相知、佐志等の肥前武士は肥後の菊池武敏に味方して、筑前博多の多々良浜に尊氏を迎え討ったが、小城の千葉や松浦党の裏切りのため武敏は敗れ、阿蘇惟直は小城から肥後へ帰る途中千葉の大軍に囲まれ自殺した。今、天山の頂上にある惟直の墓は「阿蘇が見える天山の頂上に埋めてくれ」との遺言によって作られたものと伝えられている。やがて尊氏は光明天皇を奉じて九州の諸氏を味方にしたが、その中には龍造寺、後藤、千葉らがいる。（鎮西要略）

一方、そのころの大和町においても、

元弘三年（一三三三）後醍醐天皇は高城寺を勅願寺にしたり、翌四年には天皇の側近吉田定房が高城寺領を安堵（保証確認）したり、教書を送って味方に付けようとしている（高城寺文書）

又高木氏、神代氏、国分氏等わが大和町になじみのある武将は探題（鎌倉幕府が九州をおさえるために置いたもの）討伐に参加し、天皇に味方している。なお、南北朝争乱期の大和町の中心舞台は高城寺であった。建武三年（一三三六）三月二十九日尊氏は高城寺に御教書を送り、戦勝を祈願した「祈禱の事精誠を致さしむべきの状件の如し」（訳文）の古文書や、更に同年高城寺領を安堵する文意の古文書等によってみても、あるいは保身のため寺がわより呼び掛けた事もあったろうが、九州の辺地にある高城寺が南朝や北朝より関心の的とされたことは、重視されるに値する寺であったからであろう。

なお、同年国分村地頭国分彦次郎、鑰尼次郎、鑰尼城主鑰尼三郎らは尊氏に従って高城寺山にたてこもり、南朝の菊池武勝に攻められている。（高城寺文書）こうした南北朝時代の終わりごろ出羽の玉林寺が創建されている。

(1)　太陽山玉林寺

永徳二年又は弘和二年（一三八二）九月、鑰尼信濃守季高が建立し無着禅師の開山である。

一、鑰尼季高寺地寄進状写

建立

箱崎御領肥前国朽井村玉林寺敷地山内外田畠等之事

四至　限東朽井堺堀通　限南若宮御前馬場堀道　限西四万取川　限北那於山堺

仍已後之證文如件　　季高判　　※朽井＝久池井　四万取川＝市之江　那於山＝名尾山

永徳二年九月五日

更に至徳三年（一三八六）正月十八日付で鎮西探題今川了俊より季高寄付の田地を安堵する旨の文書が残っている。

一、至徳三年＝元中三年（一三八六）今川仲秋玉林寺に佐賀郡内の地を寄進

一、明徳二年＝元中八年（一三九一）鎰尼季高玉林寺に巨勢庄内の地寄進

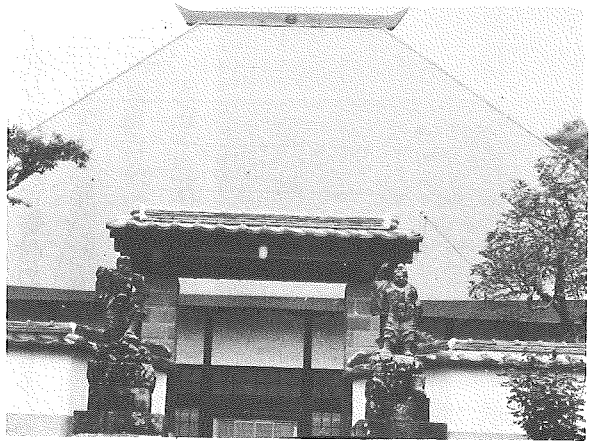
一、慶長二年（一五九七）　藩祖鍋島直茂玉林寺に寺地を寄進

玉林寺は薬師如来を本尊とした曹洞宗である。山門には四面に十六羅漢の彫像があったが、今は山門もなくなり羅漢像は本堂に移されている。この像の作者は不明だが、三月の澄み渡った夜には読経の声を聞くという伝えがあって「経読み羅漢」ともいわれている。

無着禅師は大隅（鹿児島県）の人で姓は藤原氏である。日州大慈寺無外禅師のもとで仏教の教えを受けている。曹洞宗の開祖道元和尚の第七世の法孫である。禅師は季高に頼まれて法座を開き寮を造って弟子達を養成した。惣座及び十僧ヶ原の地はその跡だという。晩年、寺の西方に羽黒権現の御堂を建て、北方の放生池畔（青年の家の所の池）に弁財天を祭った。

北朝の後小松天皇より御綸旨（天皇の意をうけて出す文書）及び「玉林禅寺」の勅額を授けられ、以

後紫衣の道場（高僧達の修験場）として曹洞宗の僧侶の任官、進級等の事を当寺で行うようになった。当時この寺が如何に権威の高い寺であったかが想像できる。



玉林寺

天聞多の寺林玉

勅額

しかし、残念ながら室町時代の中ごろ、兵火のため堂宇宝物皆灰になった。天文十一年（一五四二）後奈良天皇は御綸旨と「勅賜玉林禅寺」と「祈禱」の勅額を賜わり、これらの勅額は今もなお仏殿に掲げられている。

後奈良天皇綸旨写

肥前国玉林寺、可為勅願寺之由、被聞召畢、宜奉祈宝祚長久者、天気如此仍執達如件

天文十一年六月二十三日

南朝・北朝の勅願所と

して代々相次いで寄付の寺領も多く、残された文書を見ても

一、天文十三年（一五四四）四月十六日付千葉胤頼の御機嫌伺い書

一、元亀二年（一五七一）八月九日付神代長良の田地寄進状、千布友貞二反、今山卒都婆崎一反

一、天正十三年（一五八五）卯月十二日神代周利寺領寄進

一、天正十五年（一五八七）六月十二日神代周利久池井村築地一反　開山大和尚御仏餉田として寄進

大般若経（一部）

至徳、明徳、元亀と寄付の寺領が六十余町（六十余ヘクタール）もあったという。

鍋島藩になってからも鍋島直茂との交渉も深かったようで、御祈禱の御礼並びに麦粉二樽の進物に対する直茂からの礼状もみられ（文禄五年七月十四日付）、慶長二年（一五九七）六月二十三日付玉林寺大洪和尚あてに敷地田畠として三町四反十三歩を寄進し、国家安全一門繁栄の祈禱所とした。朝鮮帰陣の後も秀吉の軍営名護屋城の一殿を移して玉林寺の客殿としていたが、元文二年（一七三七）十二月二十七日夜半出火して諸堂の大半を焼失し、残ったのは山門、勅門、鐘楼、雑門、鎮守社だ

けで禅堂、客殿その他燃えてしまった。程なく開山三百五十年忌が来るので、当時の得宗和尚は先ず客殿、禅堂の建立を願い出て、材木その他一切を藩庁より差出された外、托鉢等によって建立を完成した。

元和八年（一六二二）三月二十一日、佐賀藩祖鍋島直茂菩提のため勝茂より玉林寺に田畑敷地四町三反二畝十二歩、地米二十七石七斗一升を与え、初代藩主勝茂菩提のため寛文三年（一六六三）四月八日光茂より山林七町余を寄進し、武運長久、国家安全、子孫繁昌を祈願している。

日峰様（直茂）御寄附　※（　）内は註釈

一、敷地　五反七畝　地米　四石九斗二升八合

一、地領田畑　三町七反五畝十二歩　地米　二十二石七斗八升五合

合　計　田畑　四町三反二畝十二歩　地米　二十七石七斗一升三合二勺

泰盛院様（勝茂）菩提のため御寄附

一、茶園畑　七畝六歩　地米　四斗三升二合（現大和町公民館敷地の南方密柑畑）

右は開山（無着禅師）茶湯用のため小城領の内より御寄附

一、山林七町余　一、正銀三貫八百目　御茶湯料

抱宮（寺に所属している宮）

一、羽黒権現　当山山林の内にあり　一、弁財天社　当山山林の内にあり

一、観音寺　〃

一、観音石像一体　寺領田端大道脇にあり（現在は御堂前へ移転）

観音石像

その後、寺の衰退期もあったようで、朝廷の意向も考慮し藩費で修理その他助成していたようである。

玉林寺には昔から有名な巨鐘があった。安政元年（一八五四）寺社奉行から「諸国の梵鐘にて大砲、小砲を鋳すべし」の布達があったので、藩はこの巨鐘の供出を惜しみ、佐賀白山の高寺と八幡社鳥居の中間の空地に鐘楼を建て城下の「時の鐘」とした。昔は実相院と共に玉林寺へ勅使下向もあり、佐賀藩初期になってから豊臣氏の定めた寺社の朱印地はすべて私領であって、幕府や本山といえども政治的干渉があってはならぬことになっていたが、このような布達は幕府が承知していただけで、民間には知らせてなかったので、朱印寺社であった玉林寺も一般寺社並みに取扱われたのである。（鍋島直正公伝より）　なお当寺に奉蔵されている大般若経六百巻については文化財篇の「法物」の所を参照されたい。

三　室町時代

概　説

室町時代は南北朝が合一した一三九二年から足利幕府滅亡までのおよそ百八十年間を指している。足利義満は京都の室町に「花の御所」と呼ばれる華麗な邸宅を造営しここに住んでいたので、足利政権を室町幕府というようになった。義満によって打立てられた将軍の権威は後継者義持の時代になるとようやく没落の兆を示し、次の将軍義教は守護赤松氏によって暗殺され、義政に至って専ら側近政治に頼り、応仁の乱を通じて将軍の権威は全く地に落ちたのである。こうして幕府自体も崩壊していった。

応仁の乱を契機として、全国的に起ち上って新しい権力の座に就いたのはいわゆる戦国大名達であった。彼等は激しい攻防戦を通じて領国を建設し、城下町を作り家臣や商工業者を集中させ、交通路の整備に努力した。荘園制を否定し、領国の体制下に置き、政治経済の基礎を固めた。これからをいわゆる戦国時代という。この戦国乱世の時代における大和町周辺の領主達はどうであったか。

戦国の世に起こる戦いの原因の多くは城主の征服欲に端を発し、力を持って他を征服し領地拡大を計る事であった。そのために多くの私兵を使って血を流し合い死んで行くという殺伐な弱肉強食の連続であった。肥前佐嘉郡から発した龍造寺氏、次で鍋島氏、小城山内、佐嘉山内、神埼山内に隠然たる勢力を持つ神代氏、豊後より攻め来った大友氏、小城の千葉氏、佐嘉城周辺の諸領主達による戦闘の繰返しは、郷土大和町の土を朱に染めていたのである。以下年代を追って主な戦いの跡を振返ってみよう。